

ヤマタノヲロチ退治神話の成立と変容

2022. 12. 4 淑徳大学人文学部 森田喜久男

1 ヤマタノヲロチ退治神話の概要

(1)『古事記』の神話

- ①スサノヲ、高天原から追放されて、出雲国の肥の河上である鳥髪のに降る。
- ②河を流れ下ってきた箸を見て河上に人がいると思い、探し求めて遡る。
- ③童女を真ん中に置いて、泣いている老夫と老女に出会う。
- ④以下、スサノヲと老父の問答
スサノヲ：おまえ達は誰か？
老父：私は、国つ神であるオオヤマツミの子、アシナヅチで妻の名はテナヅチ、娘の名はクシナダヒメです。
スサノヲ：なぜ泣くのか？
老父：私にはたくさんの娘がいたが、毎年ヤマタノヲロチがやって来て、娘を食らっていきました。最後の娘なので泣いています。
スサノヲ：ヲロチの形は？
老父：目はホオヅキのように赤く、一つの胴体に八つの頭と八つの尾があり、身にはヒカゲとヒノキとスギが生えています。その大きさは幾谷も幾峰も渡るほどの大きさで、腹はいつも血でただれています。
スサノヲ：そなたの娘を私に差し出すか？
老父：恐れ多いことです。しかし、あなた様の名は？
スサノヲ：私はアマテラスの弟である。天より降ってきた。
老父：恐れ多いことです。娘を奉ります。
- ⑤スサノヲは、クシナダヒメを神聖な櫛に変身させてみずらに刺し、アシナヅチとテナヅチの老夫婦に、何度もかもした酒を作った上で周囲に垣をめぐらし、その垣に八つの入り口を作り、それぞれの入り口に栈敷を作りその上に酒船を置いて、その中に酒を入れて待つように命じる。
- ⑥そのとおりにするとヲロチがやって来て、船ごとに頭を突っ込んで酒を呑み酔いつぶれる。
- ⑦そこへスサノヲがやって来て、身に帯びている長剣で、ヲロチを切り散らす。すると肥の河はヲロチの血で赤くなる。
- ⑧スサノヲがさらにヲロチの中の尾を切ると、剣の刃が欠けた。不思議に思って、今度は深く刺して割くと、「都牟羽の大刀」（刃が渦巻き文様の大刀）が出てきた。
- ⑨スサノヲはアマテラスにこの大刀を献上する。これが「草那芸の大刀」（臭蛇の大刀）
- ⑩スサノヲは、宮を作るべき場所を出雲に求め、須賀の地に来て、「あが御心すがすがし」と言って宮を作る。
- ⑪その時、雲が立ち上ったので、以下のような歌を詠じ、アシナヅチを宮の長に命ずる。

八雲立つ 出雲八重垣 妻籠に 八重垣作る その八重垣を

(2) 『日本書紀』の神話－『古事記』との違い－

①神代第八段本書の場合

- a.スサノヲ、出雲国の「簸の川上」でヤマタノオロチを退治し、クシイナダヒメを得る。
「草薙剣」（「天叢雲剣」）をアマテラスに献上。
- b.出雲の清地（スガ）の地でクシイナダヒメと婚姻。オオアナムチを儲ける。
- c.根の国へおもむく。

②神代第八段一書第二の場合

スサノヲ、安芸国の「可愛の川上」に降ってヤマタノヲロチを退治。この時に用いた酒は「木の実」で作ったもの。ヲロチ退治の後、クシイナダヒメを出雲国の「簸の川上」に移す。

③神代第八段一書第四の場合

スサノヲ、高天原から追放された後、新羅国経由で、出雲国の「簸の川上」である「鳥上峯」へ。子のイタケル（五十猛）神同行。ここでヲロチを退治し、「草薙剣」をアマテラスに献上。子のイタケル、多くの樹の種を持参、「韓の地」には植えず、筑紫から始めて大八洲国全体へ植えて国土を青山に変えた。

④神代第八段一書第五の場合

スサノヲ、「韓郷の島」へ渡るための「浮宝」（＝船）を造るために顔のひげを抜いて杉とし、胸の毛を抜いて檜とする。尻の毛は槇に、眉毛はクスノキとなった。その上でスサノヲは、杉とクスノキは船を造る材料に、ヒノキは宮を造る材料、槇は墓所の棺を造る材料として定めたという。また、食料となる木の実を多数植えさせた。

(3) ヤマタノオロチ退治に使った酒

- ・「八塩折りの酒」（何度も繰り返して醸した強い酒：『古事記』、『日本書紀』本書）
- ・「あまた菓を以て八甕を醸んだ酒」（木の実を発酵させて作った酒：『日本書紀』神代第八段一書第二）
- ・「毒酒」（『日本書紀』神代第八段一書第三）

2 ヤマタノヲロチ退治神話成立の歴史的背景

(1) ヤマタノヲロチの正体は何か？

①ヲロチ退治神話に関する諸説

- a. 斐伊川の治水を意味するものであるという説
- b. たたら製鉄集団の抗争といった史実を反映したものと見る説、

※傾聴に値する部分もあるが、登場する神々の名前の意味に関する考察が抜けている。

②登場する神名の分析

- a. クシナダヒメ（『日本書紀』本書はクシイナダヒメ）…霊妙な稲田の姫。
- b. アシナヅチ…晩稲の精霊。
- c. テナヅチ…早稲の精霊。

これらの神名は、いずれも農耕と密接に関わってくる。

さらにクシナダヒメの父アシナヅチの出自に注目すると、この神は山神オオヤマツミノカミの子である。

オロチ退治の神話が成立するための背景として、山間部における開発と農耕といった歴史的事実が浮かびあがらせることができる

③ヤマタノヲロチという名前に込められた意味

では、スサノオに退治されるヤマタノヲロチとは何か？

- a. 水を支配する精霊であるとする説
- b. 斐伊川それ自体の姿相の神話化という説

これについても名義そのものを考察する必要がある。

コシノヤマタノヲロチ＝コシ＋ノ＋ヤマタ＋ノ＋ヲロ＋チ

↓

「コシからやって来た尾根がたくさん分かれている山の谷間の入口に潜む精霊」

↓

これがヤマタノオロチの実態。

↓

山間部を切り開くような開発を強行すると出現する精霊。

④ヲロチ退治の舞台の設定

では、なぜ斐伊川や江の川の上流がヲロチ退治の舞台とされたのか？

ここで、注目すべきは、『日本書紀』顕宗即位前紀に記された以下の歌である。

出雲は 新墾、新墾の 十握稲を、浅甕に 醸める酒

ヤマト王権にとって、出雲は開拓すべきフロンティアであった。ヤマト王権がなぜそのような認識を持ったかと言えば、出雲が、筑紫・越・吉備などの地域と積極的な交流を展開する「北ツ海」の 十字路であり、対岸諸国とも交流していたからである。

倭国の王が「治天下大王」として狭義の倭国だけではなく、理念的に朝鮮半島（韓半島）諸国を統治すべき存在となるためには、「北ツ海」の十字路に位置する出雲をおさえることが必要であるという認識があったのではないか。

その場合、ただ単に出雲の地に国造制を施行したりミヤケを設置するだけではなく、神話の舞台として位置づける必要があった。

出雲が、ヲロチ退治や国譲りの舞台とされた理由はそこにあるのではないかと考えるが、江の川は、出雲ではないのではないかという異論も出ることであろう。

『日本書紀』神代第八段一書第二に見える「可愛の河上」は、安芸国として記されている。しかし、それはあくまでも律令国家の国で言えば、安芸国に当たるという意味でしかない。

律令国家成立以前の出雲については、その範囲は伯耆国や安芸国、石見国など隣接する国々を一部含んでいた可能性がある。

そのような「出雲的世界」こそが、「新墾」としての出雲であり、「北ツ海」の十字路としての出雲なのであろう。

(2) スサノヲは異国から来た神か？

スサノヲは、『日本書紀』神代第八段一書第四では新羅国に降った後、出雲へ向かったことが記されており、一書第五では「浮宝」を作って、「韓郷の島」に渡ったことが記さ

れている。

なぜ、このような神話が生まれたのか、それはスサノヲが異国の神であるからという理由ではない。

『日本書紀』の編者は、スサノヲをオオナムチと並んで「天下」を作った神に仕立て上げる必要があったからである。

神々の系図である神統譜を見ると、カムヤマトイワレヒコ、のちの神武天皇は天の神々と根の国のスサノヲの両方にかかわっている。それは、妻のヒメダタライスズヒメがオオナムチの子、コトシロヌシの娘だからだ。両方の系譜に連なることで、カムヤマトイワレヒコは天下を統治し得た。これが『日本書紀』の言いたかったことである。

その上で、改めてオオナムチとスサノヲの神話について、振り返ってみよう。『日本書紀』神代第八段一書第六では、オオナムチは「天下」を経営した神として描かれる。その「天下」をカムヤマトイワレヒコは受け継いでいるのである。

『日本書紀』の編者はそれを意識していた。神代第八段一書第六を読んでいくと、唐突にカムヤマトイワレヒコが登場する。

神話と密接な関わりを持つ倭国や日本の「天下」観には、蝦夷や三韓が含まれる。この点を踏まえると、スサノヲが新羅経由で出雲へ上陸したり、「韓郷の島」に渡るために「浮宝」を作らせたという神話の存在価値が見えてくる。

スサノヲは、朝鮮半島の国々と交渉を持った神として描かれているのだ。その神の子孫と関係があるということが、「天下」を統治する資格となるわけである。

『日本書紀』神代第五段本書によれば、イザナキとイザナミは大八州国や自然にかかわる神々を生んだあとで「天下主者」を生もうとした。しかし、生まれた子は、いずれも「天下主者」にはならず、天上界や根の国に行ってしまった。

天上と「根の国」へおもむいた神々とその子孫の功績を受け継ぐ形でカムヤマトイワレヒコが登場する。

その子孫が「天下主者」として国土を統治する資格があるというのが、『日本書紀』の神話の論理である。その論理を貫徹させるために、本文だけではなく一書の神話を必要とした。スサノヲやオオナムチの出雲系神話は、そのような王権神話を構成する重要な神話素なのである。ヤマタノヲロチ退治神話もそのような王権神話の神話素として理解すべきである。

3 ヤマトノヲロチ退治神話の変容

(1) 近世の地誌と『日本書紀』一書の類似

『雲陽誌』を参照すると以下のような特徴が指摘できる。

①神名表記

素盞鳴尊・稲田姫・脚摩乳・手摩乳→『古事記』の表記ではない。

②出雲への到達経路

新羅から船に乗って「鳥上之峯」に到達するという経路をとる。

③随伴の御子神

子のイタケル（五十猛神）が随行する。

このような点を踏まえると、『雲陽誌』のヲロチ退治の神話は、『古事記』ではなく『日本書紀』の神話、特に第八段一書第四に共通する。

しかし、『日本書紀』神代第八段一書第四そのものが、出雲においてストレートに受容されたかと言えば、そこは慎重な検討が必要となろう。

(2) クサナギノツルギからアメノムラクモノツルギへ

ここで想起しなければならないことは、中世以降、ヤマトノヲロチの尾からスサノヲが取り出した大刀がどのように表現されていたのかという点である。当時の人々によってヲロチの尾から出た大刀は、「天の叢雲の剣」であった可能性が高い。

たとえば、中世末期の大永3年（1523）に成立した『天淵八叉大蛇記』に

素戔嗚尊、佩く所の十握剣を抜きて、蛇を斬ること寸々。尾に至りて刃、少し欠く。
是を是かば、中に一剣有り。蓋し八雲此の起に従ふか。天の叢雲の剣、是なり。

とあり、「八雲」の由来と「天の叢雲の剣」とが結びつけられる。また、その剣は、アマテラスが「天の岩屋」にこもった時に、近江国の伊吹山に落としてしまったものだという。

この記載内容は、岡宏三氏の指摘によれば、虎関師錬の『元亨釈書』巻21資治表2 天智7年（668）条の記述とほぼ一致する。

岡宏三「内神社所蔵『天淵八叉大蛇記』について－中世出雲の八岐大蛇退治神話－」（島根県古代文化センター調査研究報告書『神々のすがた・かたちをめぐる多面的研究』 2011年）。

さらに『平家物語』においてもヲロチの尾から出てきた時点では、「村雲」に常に覆われていたので「天の村雲の剣」と称されていたのを、ヤマトタケルが駿河国において賊徒によって火攻めにされた時、草をなぎ倒して、火の向きを変えた故事にちなんで「草なぎの剣」と名づけられるようになったと伝えられている。

ところが、「天の叢雲の剣」という言い方は、実は『古事記』ではなく、『日本書紀』にもほとんど見えず、大部分は「草薙剣」である。唯一の事例は『日本書紀』本書に引用された異伝である。

◎『古事記』 …草那芸之大刀

◎『日本書紀』

○本文 …草薙剣（ただし、もともとは天叢雲剣だったということが一書に引用された形で紹介されている）

○第二の一書 …草薙剣

○第三の一書 …草薙剣

○第四の一書 …草薙剣

すなわち、「天の叢雲の剣」という言い方は、本来、『日本書紀』の異伝でしかなかった。ところが、今日では、「天の叢雲の剣」という言い方が一般的である。

では、記・紀の段階において、異伝に過ぎなかった「天の叢雲の剣」が、言わば市民権を得るのはどの段階からか。それは平安前期の『古語拾遺』の段階からである。

八岐大蛇を斬りたまふ。其の尾の中に一つの靈しき剣を得つ。其の名は天叢雲（大蛇の上に常に雲氣有り。故以て名とす。倭武尊東に征きましし時に、相模国に到り、野火の難に遇はしき。即ち、此の剣を以て、草を薙ぎて免るること得つ。更めて草薙剣と名づく）

このような点を踏まえると、改めて、平安時代以降、変容する神話の検討が必要となることがわかる。

(3) 記・紀と『雲陽誌』をつなぐ書物

では、中世や近世の出雲の神話に直接影響を与えた文献としては何が想定できるか。すでに見た『古語拾遺』には、ヲロチの尾から出た宝剣を「叢雲の剣」とするものの、ヲロチ退治神話それ自体は極めて簡略な記述にとどまる。

ここで注目したいのが、『先代旧事本紀』地祇本紀に見えるヲロチ退治の神話である。

この『先代旧事本紀』に記されたヤマタノヲロチ退治の神話は、AからEの5つの段落に区分できる。

A：スサノヲが天から追放され、子のイタケルと共に新羅のを經由して曾尸茂梨を經由して埴土の船で出雲の簸の河と安芸の可愛の河の河上にある鳥上峯に降ったことが書かれている。

B：鳥髪の地を歩いていたところ、河上から箸が流れてきたことが記される。

C：Bの箸の話を受けて、河上に人がいると思ってスサノヲが河上を上り、アシナヅチ、テナヅチ、クシイナダヒメに出会ってヤマタノヲロチを退治し、「天の叢雲の剣」を得てアマテラスに献上するストーリーである。

D：ヲロチ退治の後、クシイナダヒメと結婚し、清地に宮を定め、子づくりを行う場面である。

E：スサノヲが自分自身の身体からさまざまな木を作り、その用途を定め「韓郷」の「熊成峯」へ渡って、そこから根の国へ去ったこと。子のイタケルが樹種を大八洲に殖えて、枯山を青山に変えたことが書かれている。

このAからEのストーリーは、『古事記』上巻や『日本書紀』神代第八段の本書及び一書第一～第五の内容を引用し、再構成したものである。

『先代旧事本紀』は今まで偽書として扱われてきた。確かに、『先代旧事本紀』の序文によれば、あたかも『日本書紀』よりも古い史書であるかのように記されている。しかし、さまざまなバリエーションを持つヤマタノヲロチ退治神話群を再編し、一つのストーリーにまとめようとしていたという点に注目すべきではないか。

このような形で再編されたヤマタノヲロチ退治神話が、中世において受容されたのではなかろうか。それが出雲地方にも伝わり、地域社会において新たな解釈が加わって変容を重ね、今に至っているのではないかと思われる。